OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	福沢諭吉をめぐって ： 授業用ノート
Author(s)	嶋本, 隆光
Citation	大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究. 2003, 1, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6100
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

福沢諭吉をめぐって
—授業用ノート—

嶋本　隆光

【要旨】

たとえば、ある歴史上の人物の活動、思想などについて、その内容を学生に伝える場合、自己の理解力にのみ依存する限り、我々は知らず知らずのうちに誤謬に陥る。そこで、より確実な認識にいたる方法の一つに、同一の主題についてできるだけ多数の著者の解釈を参照することが上げられる。さまざまな見解にできるだけ多く接して、自己の解釈を相対化するのである。この方法が重要であるのは、授業において自らの一方的な解釈を学生たちに強制する危険性を回避できる点である。

本授業研究において、筆者は福沢諭吉を実例にとって、上の方法論を実際に適応してみた。福沢のようにきわめて多数の作家や研究者に、ありとあらゆる角度から論じられてきた人物は、実のところ扱いが困難である。とにかく、研究書が多いのである。したがって、筆者は少し古いが福沢論の核になるようなものも含めて、とりあえず比較的最近出版された著作を中心に福沢の可能性を探ってみた。本授業研究は、決してすべての見解を無批判に受け入れることを意図しているのではない。さらに、微妙な論点の差異に翻弄される危険性に気づいていないわけでもない。しかしながら、この方法は授業で扱う主題についてより客観的な理解にいたるひとつの方法であり、これによってより円滑でバランスのとれた授業運営が可能となると考えるのである。

古典的名著の精神に触れることは至上の喜びである。そして、その喜びと興奮を留学生と分かち合うことは、これまた楽しい。しかるに、そこには問題があった。古典的名作といわれるものは長年にわたり、多くの人々に親しまれている一方で、解釈や評価が一定しない場合があるからである。逆に、その懐の深さゆえに名著といわれるゆえんがあるのだろう。いずれにせよ、筆者は留学生日本語教育センターにおいて、主として日本語・日本文化研修留学生などと古典的名作に親しむ機会がある。特に西洋、中東、日本の近代思想を軸にした比較研究に関心があるため、日本語文献としては幕末、維新期のものを読むことが圧倒的に多い。それらの名著を極力誤解なく読む方策にはどのようなものがあるのだろうか。

ところで、幕末・維新期の思想を語るのに等閑してはならない人物は多い。その中で、文明論や近代化論を扱う際、福沢諭吉は必ず言及しなければならないであろう。翌年、現行日本国銀行券の人物が模様替えする中で、福沢のみ継続して用いられるのは、この人物と現在日本とのかかわりの大きさを示すのであろうか。おそらく、維新の時代から135年ばかり経過しても、彼の思想には今に通ずるものがあるということであろう。近年に至っても、幾多の論者による福沢論が相次いで世に問われている。

とまれ、留学生日本語教育センターの授業で、筆者は福沢の著作を扱ってきた。『学問のすすめ』、『福翁自伝』『文明論之概略』『西洋事情』など、いずれも日本人が近代化＝西洋化する過程で幅広く読まれた書物である。それらのすべてが今では、古典的名著といってよいものである。特に、『福翁自伝』に見られる緒方洪庵の適塾における無茶勉強や、初めてのアメリカ渡航と現地での体験の描写など、学生たちは強い関心を示した。

福沢が名文家であることは改めて言うまでもない。その文体は自由闊達にして、読者をたくみ

に誘い込む。文章というものはもともと己のためではなく、読む者のために書くという自明の事実を福沢ほどわきまえている人は少ないだろう。文章とは主題の選択、文体、用語、リズム、論理性、比喩などの調和のうちに成り立つ。この意味で、福沢の文は紛れもなく一級品である。無論、明治期の日本人知識人と現代人とでは学力、特に漢文の素養に基づく語彙において格段の差があるし、時代的背景にも違いがあるので、現代の日本人には容易に読めるものではないかもしれない。まして、留学生に簡単に読める代物ではないであろう。

しかしながら、これまで授業で用いた経験から言えば、『福翁自伝』は別として、『文明論之概略』などは、その明快な論理、主張ゆえに、留学生の中で一定の日本語運用能力を有する者には、丹念に読むことによって、早晩理解が容易となるようである。福沢の扱う主題は当時の日本を知る上で必須であるばかりか、現代の日本を「予言した」先見的な内容を持つものとして高い評価を与える作品が近年多く出版されている。丸山真男のように熱狂的福沢ファンを自認する者がいる一方で、彼の生きた時代から批判者も多かった。まさに、福沢論は百家争鳴の観を呈しており、一概に論じることは相当に困難である。したがって、福沢研究に関する知識は、センターでこの人物を取り上げる際の必須の前提条件となる。

冒頭の問題に話を戻そう。つまり、極力誤解なく名著を読むという話である。以前、拙稿「「知」の意味するもの―比較文化（思想・社会）の枠組みについて―」の中で、比較文化（思想・社会）の考察を行う際の目安として、5項目を掲げた。その（4）において；

> ・・・でたらめな項目の列挙は無意味である。一定の妥当な比較項目を準備、設定した上で、具体的な検討を行う。その際、改めて強調したいのは、資料の性質の吟味である。いかなる文献、口承伝承、その他の資料を利用する場合でも、利用者の主観が忍び込む危険性が常にある。従って、この危険性を削減するためには、第一次資料を用いて、資料そのものに語らせるという初歩的原則を極力守ることである。
>
> もちろん、この手順を踏んでも、解釈者に都合のよい資料を取捨選択することはしばしば行われるので、同一資料について他の研究者の解釈があれば、それへの言及を怠らないことである。(1)

と述べた。本授業研究は、福沢諭吉という人物を一例として取り上げ、上記の点、特に末尾の箇所を具体的に示すことが主要な目的である。

我々がより正確な知識を獲得する努力を行う場合、容易に犯す過誤は、無意識のうちに自己の限られた経験の壁のうちに閉じ篭ってしまうことである。これを打破する方途は絶えず研究の対象、ならびに対象を調査した結果獲得した自己の判断そのものを懐疑することである。しかし、すでに強固な城砦を築き上げ、自己満足の病弊に浸食された者にとってこれは必ずしも容易なことではない。したがって、我々に残されたより安全で確実な方法は、絶えず他者の見解を参照することである。この作業によって、一方的で独善的な判断を回避し、より公平で均衡を保った福沢像を学生たちに示すことができるであろう。

本授業研究の執筆に際して用いた文献は以下の通りである。一部の例外を除き、ほとんどすべては最近10－15年前後に出版（あるいは再出版）されたものである。

1）　福沢諭吉　　会田倉吉
2）　福沢諭吉のすすめ　　大嶋仁
3）　福沢諭吉の精神　　加藤寛

4）　福沢諭吉と福翁自伝　　鹿野正直編著
5）　福沢諭吉　その重層的人間観と人間愛　桑原三郎
6）　新しい福沢諭吉　　坂本多加夫
7）　医者の見た福沢諭吉
　　先生ミイラとなって昭和に出現　土屋雅春
8）　福沢諭吉　その武士道と愛国心　　西部邁
9）　福沢諭吉と中江兆民　　松永昌三
10）　福沢諭吉の哲学　　丸山真男（松沢弘陽編）
11）　「文明論之概略」を読む　上中下　　丸山真男

また、現在福沢の著作は全集や選集などで比較的容易に入手できるが、本文準備に際しては、岩波文庫版で利用可能なものを中心にして、必要に応じてそのほかの文献にも当たった。主要なものとしては；

1）　福翁自伝
2）　福沢諭吉教育論集
3）　文明論之概略
4）　福翁百話
5）　福沢諭吉選集　第一、第二巻、西航記、西洋事情、世界国尽、ほか，などを参照した。

さらに、留学生日本語教育センターにおいて福沢の思想なり活動なりを紹介検討するのに、この人物が生きた時代の説明が必要不可欠である。思想、哲学などは時代の産物であって、時代の社会、経済、政治的条件とまったく無関係に形成されることは通常ありえない。よしんばそのようなことが可能であったとしても、その思想がその「思想家」が生きた時代を風靡するとは考えがたい。その時代に受け入れの素地がないからである。したがって、ある人物の思想、活動を授業で取り上げる場合、最低条件としてその人物の時代の歴史的条件（社会、経済、政治的条件）を解説、あるいは再確認しておくことが必要となる。たとえば大阪外国語大学留学生日本語教育センター日本語教材叢書No.36『留学生のための日本史』（8－44ページ）などを用いて、必要最低限度の認識を共有しておくことが望ましい。

なお、本授業研究では、比較的新しい福沢論を紹介、検討するのであるが、それ以前、すなわち福沢の生前から大戦後にいたる研究史については、上記文献に散見する記述や、解説文などを参照することによって情報を得ることができる。全集や選集の解説を参照するのもよいだろう。(2)

〔福沢諭吉の経歴と彼の時代の重要な事件〕

代表的な福沢研究の紹介を始める前に、以下の議論の理解を容易にするために、彼の時代の重要事件を手短に掲載する。

1834　福沢諭吉大阪に生まれる
1840　アヘン戦争
1847　このころから漢学を勉強する

1853　アメリカ東インド会社の「黒船」浦賀に来る
1854　日米和親条約、日本開国
1855　緒方洪庵の塾に入門
1858　江戸にて蘭学塾を開く。日米修好通商条約締結
1859　オランダ語から英語に転向することを決意
1860　咸臨丸でアメリカへ行く
1862　ヨーロッパへ行く
1866　『西洋事情』を書く
1868　明治維新。戊辰戦争起こる
1871　慶応義塾を三田に移す。廃藩置県。文部省設立。
1874　民選議院設立建白
1875　『文明論之概略』を書く
1882　『時事新報』発刊。ほとんど毎日筆を取る
1884　甲申事変
1889　明治憲法発布
1890　帝国議会開会
1894　日清戦争
1899　『福翁自伝』出版
1901　没

〔福沢諭吉の思想〕

それでは、本節以下で、比較的最近書店に現れた福沢論の検討を始めよう。
丸山真男は『「文明論之概略」を読む　上』の「前書き」において；

> そうして、とことんまで惚れて初めて見えてきた対象の真実は、一時ほどの熱がたとえ醒めたあとでも、持続的な刻印として当人の頭脳と胸奥に残るものである。少なくとも思想書については私はこう信じている。繰り返しいうように本書は「福沢研究」一般ではない。あくまで『文明論之概略』を通してみた福沢という思想家の姿を、福沢惚れを自認する私のまずしい解説によって、いくらかでも読者に伝えることが私のさし当たっての狙いである。(3)

と述べ、自ら福沢諭吉の熱烈なファンであることを告白している。この点も含めて、後述するとおり、西部邁は丸山を痛烈に批判するが、まずこの現代日本政治思想史の大家の福沢解釈を見てみよう。丸山は「福沢諭吉の儒教批判」の冒頭で；

> むろん一つの纏まった思想体系としての儒教がどれほどの規制力を持ったかという事になると、儒教の最盛期とされる徳川時代でもかなり問題であり、また思想界のみに就いて見てもそれが殆ど独占的地位を占めたのは徳川前期だけであるが、儒教の強力性はそのような体系としての影響力にあるのではなく、むしろ儒教のもろもろの理念が封建社会の人間にとっていわば思惟範型（Denk-modelle）となっていたという点に存する。(4)

さらに；

一旦かかる呼称が社会的に普及すれば、封建的身分関係が儒教的範疇を視座として認識されることが次第に習慣的となり、それに応じて五倫五常という如き儒教倫理が殆ど無意識的にやがて一切の社会関係の観念的紐帯として通用するに至ることはきわめて自然である。(5)

と述べている。福沢の生涯における反儒教主義の本質を理解する上で、彼の敵を丸山がこのように捉えている点は重要である。「この時代における諭吉の活動が儒教に対する闘争を最大の課題とし、いな殆ど唯一の目標としていた・・・・・」とされるが、人々の間に儒教的思考範型は「殆ど生理的なものと」さえなっていたというのである。

丸山のこの指摘は福沢の思想を理解する上で極めて重要であると思う。彼の経歴を見てわかるように、漢学の学習を開始したのは平均的武士の子供の標準から見て後発であったとはいえ（彼は14歳から始めている)、中国古典に関する理解度が相当の水準に達していたことはよく知られている。(この点に関しては、やや解釈の異なる松永による中江兆民との比較研究がある、後述)。したがって、後に洋学者の先鋒となり「門閥制度は親の敵でござる」とまで言って反儒教主義を唱えたものの、福沢の批判は相手を知悉した上でなされたものであった。むろん、このように述べることは、彼が儒教を公平かつ予断抜きに評価していたという意味ではない。(6) とはいえ、丸山の指摘を踏まえるとき、福沢が戦わねばならなかった対象の一端が明らかになる。

文久二年（1862）パリにて

ところで、丸山の福沢論の大きな特徴は、福沢の思想に生涯にわたり一貫した「哲学」があると主張する点である。攘夷主義、排外的思潮に対しては終始一貫して反対した諭吉ではあったが、対朝鮮・シナの外交問題に関しては最強硬の積極論者であった。その背後にあるのが反儒教主義であったというのである。アヘン戦争や甲申政変などについて；

この隣国の情勢のうちに、恰も前述した明治十五年来のわが国の儒教復活に対する生きた警告を見出している。・・・中略・・・かくて支那朝鮮は彼が歴史的必然と信じた文明開化の世界的浸潤に抵抗する保守反動勢力の最後の牙城と映じたのである。されば朝鮮の近代化運動へのわが国の後援を巡って、対清関係が漸く悪化するや、従来の国内儒教思想に対する諭吉の抗争の全エネルギーは挙げて，儒教の宗国としての支那に転じていったことはきわめて自然であった。(7)

さらに、

ここに諭吉が嘗て『学問のすすめ』や『文明論之概略』に於て過去の日本に向けられた峻烈な批判がそのまま支那を対象として複写されているのを見出すに難くないであろう。従って朝鮮の改革に就いても彼は、「朝鮮の改革は支那儒教の弊風を排除し文明日進の事を行うもの」であるから、「改革の当局者は彼我両国の為めのみならず、世界共通の文明主義を拡張するの天職を行うものと心得て終始するの覚悟肝要なるべし」と激励し、・・・中略・・・終始輿論の再強硬陣営をリードしたのである。諭吉に於ける独立自由と国権主義との結合が反儒教主義を媒介にしていたということは日清戦争がもっとも明確な形で証

明したということができる。[8]

民権論者であった福沢に中国、朝鮮に対するこのような態度があったことはよく知られている。これを説明するのに丸山は、たとえば加藤弘之や田口卯吉などに言及しながら；

> しかも福沢の思惟傾向になにゆえに彼らのいずれにも見られぬ独自の色彩が生まれたかということこそが問題なのである。福沢がいかにそれら西洋学者の諸説や史論を自家薬籠中のものとし、完全にそれを彼の国と彼の時代の現実に従って、自己の立場の中に溶解したかということは、彼此の著作を細密に点検すればするほどますます深く納得されるであろう。[9]

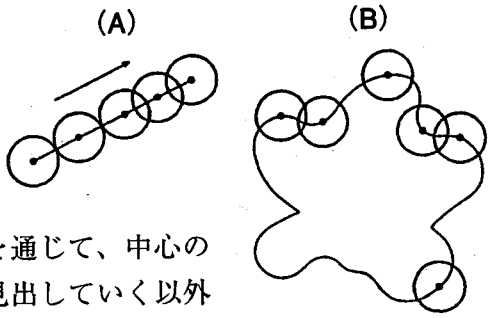
すなわち、（福沢の）「これらの所論はいずれも時代と場所というsituationを離れて価値決定はなしえないという命題に帰着する。」のであり、「そうしていかなる観点をとるかという事はその時々の具体的状況における実践的目的によって決定されるという事になるのである。」という。したがって福沢は西欧文明すらを相対的に評価するのであり、この傾向は「単に彼の愛国心とか国家主義とかいう事に帰せられるだけでなく、彼の根本的な思惟方法に直接連なっていることである。」ということになる。つまり、

> この様に福沢は一面ヨーロッパ文明の熱烈な伝道者でありながら、しかも他面において絶えずその価値を相対化する用意と余裕を忘れず、その時々の具体的状況に応じて、例えば文明開化の盲目的心酔時代にはむしろその批判者として現れ、逆に復古的反動的風潮が支配的たろうとする場合にはいつも断乎としてヨーロッパ＝近代的なものの側に立ったのであった。[10]

このような考えに立つと、当然のことながら次のような見解が提出されることになる。

> 福沢から単なる欧化主義者乃至天賦人権論者を引出すのが誤謬であるならば、他方、国家主義者こそ彼の本質であり、文明論や自由論はもっぱら国家論の手段としての意義しかないという見方もまた彼の条件的発言を絶対化している点で前者と同じ誤謬に陥ったものといわねばならぬ。[11]

以上で丸山が示した福沢の立場（思惟方法）は、鎌田栄吉のコンパス論（図A）に対して、図示すれば図Bのようであって、「中心自体も曲線で動いており、もう一方の動く円（状況）との関係で中心が決まってくるわけです。どういう場にあるかということで、中心のあり方、場所が違ってくるわけです。だから、場を通じて、中心の軌跡の一定の法則性—その意味で動かない規則性—を見出していく以外ない。」ということになる。[12]



また、丸山は、福沢の思惟方法を次のように要約している。『文明論之概略』の一節に言及して（巻之三「知徳の弁」を参照）；

> 「人、或は云わん」は、キリスト者など宗教家の批判を意識しているのでしょうが、ともかくここは、第二章の「西洋の文明を目的とする事」と非常に調子がちがっているでしょう。自国の独立が失われる、植民地化の一歩手前にあるのだという危機感があふれ出している。国と人民が存しなければ、文明もへったくれもないではないかとまで言っている。そこが福沢の考え方の、ある意味で手に負えないところなのです。同じ右の章で文明の本旨から

見れば、自国の独立など「細事」にすぎないとまでいっております。「細事」だと見る巨視的な目と、しかし、その細事こそ今は緊急で切実な課題だ、という危機の状況判断とが結びついている。おどろくべき成熟した、政治認識です。こういう風に、相反する命題を同時進行させながら論じていくわけです。(13)

と述べている。私見では、このような思惟方法や政治認識を「成熟した」といえるのかどうか不明ではあるが、このような丸山の福沢論を徹底的に批判するのが西部邁である。これまで筆者が丸山説を比較的詳しく紹介してきたのは、同氏の解釈が一般に幅広く受け入れられた福沢像の代表的なものであるからである。

さて、西部は、『福沢諭吉—その武士道と愛国心— (14)』の中で、福沢諭吉を個人主義者、合理主義者、偏知主義者、グローバリズムの擁護者であるという世間で影響力を行使している福沢解釈（言うまでもなく丸山説を中心としたもの）は、近代民主主義者の国家嫌い、愛国主義嫌いから来る偏った見方であるとして、これをほぼ全面的に否定する。むしろ福沢は愛国的であり、武士道精神を保持し、情けに厚い人物であったとする。西部は福沢を「境界人（マージナルマン）」であるとして、「境界人」を次のように規定する。

・・・少々大胆な仮説であるが、諭吉における平衡感覚はそのボンサンス（良識）に、あるいは良識をその中心に秘めている人々のコモンセンス（常識）に、繋がれていたと私は思う。

逆にいうと、少なくとも人間・社会の方面に関する彼の知見は、思春期の学習がそれ自体としては思想といえるほどのものになりえないのであってみれば、ヨーロッパとアメリカで仕入れた教科書および啓蒙書を通じてのものにかぎられるのである。そして諭吉の場合、そうした書物にかんする理解と解釈が彼自身の思想にもとづいてなされている。つまり異国の意見の単なる紹介でも喧伝でもなく、それを彼の思想の中に巧みに組み込んでいるのが諭吉の著作群なのだ。その際、彼自身のオリジナルな思想は、一体、どこからやってきたのか。儒学でも国学でもなく、そして洋学における自然科学的な知識でもないとしたら、それは良識・常識からやってきたとしかいいようがない。

私のいいたいのは、諭吉をコモンセンス・フィロソフィつまり常識哲学を図らずも語った人物とみなすときにはじめて、その著作における論理の交錯めいたものを解きほぐせるということである。諭吉にあって、人間交際のあるべき姿が確実に存在するのだと、良識によって前提されていた。そして世間の常識の最も確かな部分としての良識は、そのあるべき人間交際の形を、すでに了解していると彼は深く感じ取っていた。そしてそういうものとしての常識・良識はけっして単調でも単色でもありえない。なぜといって、人間交際における多種多様な諸要素のあいだの平行の取れた組み合わせ、それが人間交際のあるべき姿形だからである。

人間存在および人間関係の多様性にたいして常識・良識にもとづいて統一的な像を与える、それが諭吉のなしたことの真髄ではないのか。またそういう作業ならば諭吉のような（学術的な意味では）無思想の人間にもなしえた、ということではないのか。というのも諭吉には、その境界人としての立場と才覚からして、常識・良識の真髄たる「葛藤せる諸要素の平衡」を洞察する精神の力量が備わっていたと考えられるからである。(15)

西部の書物はこのなんということもない「仮説」を主調低音として書かれている。筆者には西

部自身の「イデオロギー」が随所に見られる点を否定しようがないと思える反面（例、本文pp.8-9)、徹頭徹尾なされた丸山批判は、いわゆる通説を新たな角度から読み直すのに有益であると考える。

まず福沢が道徳を軽んじ知識を重んじるという偏知的傾向を採る立場に対して、逆に「聡明の大智」＝「良識」こそが彼の最大の関心であったという。むしろ「諭吉の公徳にたいする関心が並みの水準にはなかった、と認めるのでなければ、彼の文明論を本当は理解できないはずなのだ。」と、西部は言う。さらに、福沢がglobalな価値の擁護者であるという評価に対して、むしろ武士道的、尚古的性格を指摘する。そして、士族たちの「義武の心」を彼らのパトリオティズムとかかわらせており、福沢の「士族に対する期待は、その文明開化論にとって必須の位置にある」とする。さらに、この態度は彼の報国心へとつながると西部は考えていて、丸山が諭吉を相対主義者とする観方は大東亜戦争、太平洋戦争期において絶対主義的な思想が異常な高まりを見せたことについての記憶から来る一種の強迫観念に過ぎないという。このように、むしろ公徳、公情に根付いた福沢の報国心（愛国心）を強調する。

一方、国家と国権に関しては、「政権強なれば民を苦しめん、民権強なれば政府を煩わさん」とみる平衡感覚を（福沢は）保ち続けたとして、「独立市民が国を背負う政治的立場に身をおくことはむしろ当たり前のこととされていたのである。」そして、

> ここで私の指摘したいのは、“国権のことについて思う公共心”、それが国民の間に醸成されるのを諭吉は期待していたということだ。それは国民が（丸山のいうのとは反対に）明確な“政治的立場”にたつということを意味する。少なくともそれが諭吉の考えた国民の標準の姿だということになる。(16)

これに対して、福沢を「多元的権力論者」と考える丸山の思考には、「・・・社会の成り立ちを階級間対立あるいは集団間相克によって説明しようとする、丸山史観とでも呼ぶべきものが顔をのぞかせている」、ことになる。

このように、西部の立場は通説として広範に受容されてきた丸山説を酷評する。その判断の基準はといえば、諭吉の「良識」であった。その良識とはこうである。

> 公私にわたる知徳の平衡感覚を表すものとしての良識が認識作業に従事する知識人層—マスメディアにかかわるものたちのことも含めて—によって支持されるとはかぎらない。逆に、専門化によって断片と化してゆく知識が、諭吉のいうところの「有形の文明」（技術）を発達させるとしても、「無形の文明」（精神）をむしろ後退させているというのが諭吉の死後（今世紀）に起こったことである。
>
> また決断作業にたずさわる政治家層が良識を守護するかといえば、専門知・断片知を吸収することによって擬似知識人化した民衆—それが現代の「大衆」である—の人気を獲得しなければならない、それが彼ら政治家に宛がわれた現在の位置である。したがって彼らは、知識人とともに、良識の破壊者になり果てるほかない。
>
> 認識といい決断といい、言葉がそれらの根底を支える。そして言語表現の良し悪しは、根本的には、歴史の流れのなかで形成され持続され来たった言葉遣いの良否の基準によって判別される。当然ながら、人間の言語活動は矛盾、逆理、二律背反の葛藤に満ちているのであり、それゆえ、その言葉遣いにかんする基準とはまずもって平衡感覚の在り方を指し示すもののことであり、それをさして私は良識とよんだのである。(17)

そして、結論として；

> 近代主義に毒された知識人たちには、このような非凡な英知を含んだ平凡な科白を吐くことができない。彼らに取り憑いた個人主義的な自由と技術主義的な合理が「国民」の感覚や「国家」の観念を錆び付かせてしまうからである。国民国家なるものが世界に普及しはじめたのは近代という時代の誕生と軌を一にしているというのに、近代の知識人は「国」に反逆したりそれから逃亡することに喜びを見出してきたのだ。(18)

私見では、西部の立場は英国流の経験主義に基づく常識（コモンセンス）のあり方を敷衍しているのであり、彼のアングロフィルの感情が福沢を通して投影されている印象がある。ところで、西部が用いたボンサンスとコモンセンスに関して、両者が果たして均衡を保ちながら一人の人間に保持されうるものか、両語の間には明白に異質な性格があるように思われるのだが。(19)

〔福沢諭吉と経済思想〕

一方、坂本多加雄『新しい福沢諭吉』は、「福沢の議論はほとんどの場合、『今』の時点での状況を前にして如何なる措置や対処が必要かという観点から展開されて」おり、「さしあたりの目標として、現在の西洋諸国を模範としなければならない」という、「目下の課題の達成という実践的関心」に導かれていたと考える。すべからく、その議論は状況に応じて自在であった、という。さらに、坂本は；

> さて、このように見てくると、福沢の文章の多くが、その時々の実践的関心によって記されているからといって、「文明」をめぐる福沢の原理論それ自体を浮かび上がらせることが無意味な試みではないことがわかります。むしろ、福沢の思想の全体的性格を立体的に把握するうえで、不可欠な作業だということになります。本書では、まさしく、そのことを配慮して、福沢が「文明」といった言葉で考えていた社会の有様を市場の原理によって理解しようと試みてきたわけです。(20)

と述べて、福沢を現在に通じる市場原理的進化論者として高い評価を下している。そして、「福沢のイメージする経済の世界は、彼が学び取った同時代のイギリス古典派経済学が想定しているそれを超えるような面がありました。そしてそこに、福沢の「文明」の思想の特質を解き明かす重要な核心が潜んでいるように思われます」という。

つまり、福沢の経済観は、功利主義原理に立脚し、まるで自然法則的に静的に循環する、いわば「機械的世界観」ではなかった。彼がこれに加えて人間の存在の余地を与えた、とする坂本は、福沢の社会思想は、小規模の独立した商工業者が次々と勃興していくような社会状況に対応するものであったため、「企業者」の精神が反映していると考えるのである。

福沢は現在の世界、とりわけ人間の行動にかかわる領域は、予測不能の事態が頻発するという認識があった。そして、この予測不能で不確実な有様を意識しながら行動するという構えが、福沢の人生態度全般に関わっていたのではないか」という。「ただ、福沢の『文明』の根底に市場のイメージがあったことから、こうした不確実性への対処ということが、まさしく成功、失敗という劇的な帰結を伴って示されるのは、やはり経済の世界においてだということになります。」と述べて、福沢の思想における経済の重要性を強調する。ただし；

> そこで重要と思われるのは、福沢において、とりわけ、この世界の不確実性やそれについ

て対処する能力についての認識が育まれていくにあたっては、福沢が無意識のうちに継承していた日本の思想的伝統の中に、そのようなことを促すような基盤があったのではないかという点です。以下、あくまで仮説的な見地に立って、大筋を追うという形で考察を進めたいと思いますが、さしあたり注目したいのは、福沢がこの世界の不確実性を説くに当たって用いていた「活物」という言葉です。(21)

と述べ、福沢の思想の背後には伝統的な思想（儒教）の影響が見られるという。そして；

福沢は、ともすれば、ひとえに西欧的な合理主義者としてのイメージのみで語られています。しかし、以上で見てきたように、福沢が日本の伝統的な世界観の流れのなかに確固とした位置を占めている思想家であることはを確認することは、やはり福沢の思想を理解するうえで重要だと思われます。そして、そのことが、また、西欧の別の思想的伝統に呼応するような言説を可能にしていることを考慮すると、福沢の言説を通して、私たち自身の「文明」の思想の系譜を日本の伝統の中に探りながら、同時に、それを世界的な比較の視野のなかで、より自覚的に再構成していく道が開けているのではないでしょうか。(22)

と結論づけている。

前節で紹介、検討した西部はその著作の中で坂本の書物をも取り上げ、基本的には丸山と同思想であるとしながらも、上記引用文を含むいくつかの重要な点について同意している。特に、福沢の新しい要素と平行して古い＝儒教的、封建的な影が伴うことを認める点は両者に共通する。ただ、坂本が「脱亜論」に関して記しているような、「彼の危機意識と憂慮に基づいた国際情勢認識から生まれた状況的な議論が明らかになった」という認識で、隔たりがある。

〔福沢諭吉の伝記〕

これまで丸山、西部、坂本による福沢の思想を分析、解説した著作を扱った。これらの作品には、福沢は日本の近代から現代に至るまで強い影響力を行使し続けているという共通の大前提があった。評価の重点はそれぞれ異なるものの、福沢の果たした役割を積極的に評価する点で一致する。それでは、この福沢という人物を知るために、次に彼の生涯を扱った作品をいくつか紹介、検討してみよう。というのも、福沢の思想に重点をおく著作では、彼の思想や活動を歴史的（時間的）に把握する視点が必ずしも鮮明ではないからである。福沢の思想を扱う場合でも、彼の年齢、時代の状況などを考慮に入れないわけにはいかない。彼が一貫した思想を生涯抱き続けたという主張に固執する必要はまったくない。中でも、国権論をめぐる福沢の変節が議論の対象であった。私見では、20－30代でヨーロッパ文明の紹介者、啓蒙家であった人物が、熟年、老年期を迎えて一定の名声、社会的地位、経済的成功、安定を得た後、当時の世界情勢の変化の中で日本の立場を「愛国的」に擁護したとてなんら不思議ではない。一貫して一定の高邁な理想主義的主張に殉じるタイプの人間では福沢はないのではないか。筆者には福沢は徹底した現実主義者・功利主義者であったように見える。

とまれ、本節では、伝記的著作を取り扱うことにする。会田倉吉『福沢諭吉』は、全体として福沢に同情的擁護的ではあるものの、幅広い資料に依拠しながら手堅く人物の生涯を記述している。一般的に福沢の生涯で面白いのは、その前半生である。そして、その時代に関する情報の多くは、『福翁自伝』に依る。福沢自身もそのように己が人生を捉えていたのであろう、維新期以降のことについては『自伝』でさほど多くを語っていない。無論、明治時代に入ってからのことは、『時事新報』(1882年創刊)を通じて健筆を振るっていたため、自伝に改めて詳述する必要がなかったのかもしれない。いずれにせよ、会田の『福沢諭吉』は、福沢の人となりを歴史的に順序立てて知るのに便利である。しかし、上にも述べたとおり、福沢に一貫した開明的自由主義者という立場を見ようとするため、たとえば「24章国権皇張論」で明白な弁護を行っている。

著者によれば、これは当時の民権論が征韓論争後、民選議院設立建白から始まり、次第に激化して、ややもすれば政府転覆をも志向する現状の下で考えねばならぬとする。あくまで、国権をないがしろにする状況の中でこれと均衡を保った議論であるというのである。

> 諭吉のいう国権はつまりあくまでも国際的な国家間の平等と、それにもとづく国民的独立を言うのであって、国民の自由や権利を抑える意味での国家権力なのではない。むしろ、それは国民の自由と権利を保障すべきはずのものなのであった。(23)

さらに、

> 諭吉は持ちまえの現実主義からお先ばしりの空論には決してくみしなかったのであった。つまり、諭吉の国権論は必ずしも民権論に優先するものではなく、民権はあくまでも正論で国権は権道であるが、このような時勢にあたってはあえてその権道もやむを得ないというのが諭吉の言なのである。(24)

> 明治十八年に執筆した「脱亜論」なる短い論説が諭吉にあって、近年よく話題にされているようであるが、その真意は一言にしていえば、わが国の隣国たる「支那」「朝鮮」がすみやかに旧套を脱して近代化への道を歩むことを要望し、もしそれがかなわぬならば今後は行を共にしえないというもので、諭吉はこれに先だって、現実にも「朝鮮」の真の独立に非常な熱意を示してそれを支援し、そういう独立運動家たちからもかなりたよりにされていたのであった。(25)

筆者はこの問題に最終的判断を下す能力を持たないが、日清戦争の勝利の報に諭吉が感激したその喜びは、素直に日本の国権拡張を喜んだと考えてよいと思う。この点で、鹿野政直『福沢諭吉と福翁自伝』は;

> 日清戦争の始まった明治二十七年、福沢はすでに六十一歳になっていました。そのころでは、もう老人です。『時事新報』に寄せる社説の数も、めっきり減っていました。ところが、開戦前後の六・七・八月になると、みるみる元気が出たとみえて、ほとんど毎日のように、文章を寄せるようになりました。福沢はこの戦争こそ、文明と野蛮の戦争であると振るい立ったのです。そうして、清国を従わせることは、世界の文明が日本に任せた務めである、とまで言い切っています。そればかりではなく、かれは、もともと寄付嫌いだったにもかかわらず、その当時の金で一万円を、軍事費として寄付しました。
>
> 戦争へのあまりの熱心さに、『時事新報』は、海軍の御用新聞かと言われたほどでした。

「日清戦争など官民一致の勝利、愉快とも、有難いとも、言いようがない。命あればこそ、コンナことを見聞するのだ。前に死んだ同士の朋友が不幸だ、アア見せてやりたいと、毎度私は泣きました。」という『自伝』の文章に、福沢の気持ちがよくあらわれています。

しかし、日清戦争が、勝利のうちに終わりを告げ始めると、福沢は“文明”の報酬を露骨に要求するようになります。今こそ朝鮮に金を貸し、人を送って、朝鮮を縛りあげなければならない、とかれは、盛んに主張するのです。それは、他国の人々の解放を妨げるばかりか、その人々をドレイ化してゆくことでさえありました。

アジアと日本という問題について、福沢が採った態度は、今日のわたくしたちに、いろいろのことを考えさせ、また、反省を迫るものをもっているように思われます。(26)

と記し、晩年の福沢の姿勢をまとめている。さらに、同著者は福沢が「国の富強のために人種改良論の主張者でもありました。福沢の女性解放論には、そのために女性の心身の強壮をはかろうとする目的がすえられていました。それだけに病にたいする偏見がしばしば露出しました」と述べている。このような記述は、一般に信じられている福沢のイメージとかけ離れている印象があるせいか、とかく擁護論者が書き落とす事実である。(27)

鹿野の著作は、『福翁自伝』の中で読者の関心が高いと思われる箇所を選別し、それに解説を加えたものである。筆者はこれまで、『自伝』を留学生に紹介し、かつ共に読んできた。緒方塾での生活、特に無茶勉強のくだり、米国、ヨーロッパ渡航の箇所などを読んできた。冒頭でも記したように、古典的名作は直接読むのが絶対条件である。人の解釈を介してしまうと、面白さは半減である。とはいえ、何事にも先達はあらまほしきことで、鹿野の著作は『自伝』の手引書として、またその解説にも通説に囚われない内容を含む点で、通説と合わせて利用すると効果的である。元来、若年層の読者を対象として編集されたものであることも、留学生の福沢入門書としては適しているかもしれない。

松永昌三『福沢諭吉と中江兆民』は、年齢こそ12歳ばかり違ったものの、1901年にこの世を去った二人を対照的に配置し、両者の相違を浮き彫りにしている。著者は、福沢を徹底した欧化主義者とみなす一方、中江はもちろんヨーロッパ（フランス）の影響を受けながらも、日本的伝統との融合、バランスを保とうとした人物であるとする。この点は、慶応義塾と仏学塾のカリキュラムにおける漢学の扱いに顕著に現れているとする。前者はこれを一切無視した。

両者のこの相違は「脱亜」の態度にも明瞭に表れていると松永は言う。ヨーロッパ人の植民地での傲慢さに触れ、次のように述べている。

福沢は、ヨーロッパ人の態度を非難しながらも、そこにある種の痛快さを感じ、日本もそのようなヨーロッパ人と同様の優越的立場に立ちたいと思っている。それは日本を独立国家として西洋諸国と並び立ちたいとの念願と重なり合っている。福沢は、西欧文明の摂取による日本の富強化は最優先の課題であるとし、西欧化＝近代化を進めることは、西欧列強のように他地域を植民地化していくことを必然とし、日本が文明化を指向するかぎり、そうした道をたどることは不可避とみた。(28)

以上で行った代表的福沢論の検討・紹介から知れるように、ひとつの対象をめぐる解釈は種々多様である。それらのすべてを一人の人間がことごとく知り尽くすことなどできるはずはない。しかしながら、重要な解釈、理解の仕方をあらかじめ知っておくことは、授業運営上必須の事項

である。その際、微妙な議論の迷路に迷い込むことは危険であるから、これには細心の注意を払わなくてはならない。授業では微に入り細を穿つ議論や事実関係の詮索が重要なのではない。むしろそのようなテクニカルな問題は、特別な場合を除いて授業に持ち出さないほうがよいだろう。そうではなく、大切なのは、多様な論者の主張を大まかに分類しておくことであり、些細な意見の違いは取捨してよいということだ。古典的名著の精神に直接触れようとする学生たちを混乱させぬこと、極力均衡を保った状態へと導くように努めること、これに尽きると思う。

おわりに

本授業研究をしめくくるにあたって、書物による研究と実地見学について述べてみたい。「机上の空論」といわれるが、これはもとよりよい意味ではない。書物の世界は読者の想像力を飛翔させる知的空間である一方、時に現実離れしたところへ読者を導くことがある。このような弊害を回避するためには、実地見学がよい。両者にバランスが保たれている場合、知識吸収の効果は倍増する。そのため筆者は可能なかぎり実地に現物を見ることに努めてきた。

中津にある福沢の生活した家

昨年11月、特別コースの学生たちは大分県にある福沢が少年時代に生活した家を訪れる機会を持った。また実際に彼が使った生活用品や最初期の書物などを直接見ることができた。彼の著作を授業で読んだ後、そのような場所を訪れると効果はいっそう増す。幼少のころ貧困のうちに育ち、苦学した納屋の二階にある勉強部屋など、いくら書物を繰り返して読んでみても、想像には限度がある。また、毎年慣例行事のように、学生たちと北浜にある適塾の建物を訪れている。諭吉が昼寝の枕に用いた床の間、塾生たちが雑魚寝した二回の大部屋、一部しかないオランダ語辞典（ヅーフ・ハルマ）など、『福翁自伝』を読めば確認できる事柄である。

大阪の適塾

このように、より確実な知識を獲得して、それを留学生たちに伝えるという作業は、両面的であると思う。それは知能のみによる作業ではなく、足や手、目、耳、鼻、五感のすべてを用いて行うものであるというのが持論である。その作業は決して苦しいことではなく、それどころか、この上ない喜びと感動を与えてくれるものなのである。

脚注

1）　拙稿「「知」の意味するもの—比較文化（思想・社会）」の枠組みについて—」大阪外国語大学留学生日本語教育センター、『日本語・日本文化』第27号、2001年3月、p.25.

2）　石田雄編『福沢諭吉集』筑摩書房、1975年、や永井道雄編『日本の名著33、福沢諭吉』中央公論社、などを参照。

3）　丸山真男『「文明論之概論」を読む　上』,岩波新書、1996年、iv.

4）　丸山真男『福沢諭吉の哲学』松沢弘陽編、岩波文庫、2002年、pp.7-8.

5）　同上、p.8.

6）　勝部真長『和辻倫理学ノート』東書選書、1979年、pp.131-142において、福沢について和辻が語った内容が記録してある。その中で、たとえば、「福沢の漢学の教養、理解は、大して深いとはいえまい。漢学を理解するセンスに欠けていたように思われる。もっとも、そういう道理の感覚の欠けている点では、彼は洋学においてもそうであったろう。福沢に較べれば、松蔭にしても南州にしても、はるかにセンスが豊かであった。どうもこの人は法螺を吹くことがうまいのだ。」とかなり手厳しい。

7）　丸山、『哲学』、p.31.

8）　丸山、同上、pp.32-33.

9）　丸山、同上、p.69.

10）　丸山、同上、pp.78-79.

11）　丸山、同上、p.80.

12）　丸山、同上、p.178.

13）　丸山、『読む』pp.118-119.

14）　この立場から福沢を論じたもので最近の著作に、桑原三郎『福沢諭吉—その重層的人間観と人間愛—』丸善ライブラリー、1992年がある。

15）　西部邁『福沢諭吉—その武士道と愛国心—』文芸春秋、1999年、pp.18-19.

16）　西部、同上、p.173.

17）　西部、同上、p.149.

18）　西部、同上、p.214.

19）　コモンセンスとボンサンスの西部の用法に関して若干気になる点がある。たとえば、中村雄二郎、『術語集—気になることば—』岩波新書、1984年、pp.81－85において、中村は、両者の相違について、小林秀雄を批判しながら「この二つはそんなに簡単に同一視できるものではない。」と述べている。

20）　坂本多加雄『新しい福沢諭吉』講談社現代新書、1997年、pp.190.

21）　坂本、同上、p.173.

22）　坂本、同上、p.181.

23）　会田倉吉、『福沢諭吉』吉川弘文館、1974年、p.228.

24）　会田、同上、p.230.

25）　会田、同上、pp.232-233.

26）　鹿野政直『福沢諭吉と福翁自伝』朝日選書、1998年、pp.199-200.

27）　有名な記事としては、「配偶の選択」「人種改良」などがある。これらは共に『福翁百話』創元社、1952年に掲載されている。

28）　松永昌三『福沢諭吉と中江兆民』中公新書、2001年、pp.145-146.

（しまもと　たかみつ　　本センター助教授）